



城東図書館 2023年12月22日～1月17日実施

まちのひと 薬師院 仁志さんの紹介本リスト

社会学者

相対性理論入門	内山竜雄/著	岩波書店
<p>内山龍雄先生の名著です。私が高校生のとき書店の新刊書コーナーで出会い、学習参考書ではなく、思わずこちらを買いました。その選択は、大正解でした。一気に読了後、一面識もない著者を「先生」と呼びたくなった次第です。この本の中で、先生は基礎的な四則演算しか使っていません。それでいて、内容は専門書レベルです。先生は、誰にでもできる計算だけを使い、相対性理論の本質を解説するという離れ技を見事にやってのけたのです。だから、先生は、こう言います。著者がこれだけ頑張って書いたのだから、今度は読者が頑張る番だ、と。だから、頑張って読みました。</p> <p>残念ながら、今では相対性理論の中身の方は、かなり忘れてしまいました。しかし、自分が社会学者として本を書くようになったとき、いつも思い出すのは先生の本です。普通の言葉と平易な文章で高度な内容を伝えること。それが学者の使命です。先生は、私に、そのことを教えて下さいました。</p>		
第三身分とは何か	シエイエス/著	PHP研究所
<p>6月末から7月にかけてフランスで起きた暴動は、まだ記憶に新しいところですが。この暴動は、警官が少年を射殺したことへの抗議デモから始まりました。フランスでは、国家権力が少しでも納得のゆかないことをすると、必ずデモやストが起き、それが時として暴動に至ることも珍しくないのです。1月から2月にかけては、年金制度変更に対する大規模デモが頻発しました。</p> <p>そもそも、現在のフランス共和国の原点は、大暴動で古い支配者を打ち倒した革命なのです。その理論的支柱は、もちろんルソーの思想です。ただし、それに直接的な火を付けたのは、1789年の1月に出された本書だといえるでしょう。本書の中で、シエイエスは、怒りを込めて世襲身分の不当性を訴え、支配者たちの身勝手な政策を糾弾しています。政府や国家権力が何をしても、国民が下を向いて黙っているような恐ろしい国を作ってははいけません。シエイエスは、そのことを教えてくれています。</p>		
につぼん部落	きだみのる/著	岩波書店
<p>『ファーブル昆虫記』を和訳した山田義彦は、山間の小集落に暮らした経験から、きだみのるの筆名で、本書を含め自らの体験を数冊の本にまとめました。その真髄は、「日本の人口が一億になろうが二億になろうが、この数は一種の感情皮膚で包まれた部落みたいな小集団の繰り返しの中に吸収されて日本の全体社会を構成する」という指摘でしょう。つまり、日本の社会は閉じた小集団の寄せ集めだということです。しかし、社会学者からみれば、これは社会とはいえません。社会とは、赤の他人との連帯に立脚する集合体だからです。私たちは、欧米流の社会には暮らしていないのです。そもそも、社会という単語自体、明治期にソサエティの和訳として創作されたものです。当然、ソサエティなる初見の語に社会なる新造語を充てようとも、その中身が理解できないという点では変わりません。きだみのるの本は、自分が暮らす世の中について、改めて考え直させてくれました。</p>		
ナチスの時代	ヘルマン・マウ、ヘルムート・クラウスニック/著	岩波書店
<p>2014年春、英国のチャールズ皇太子がロシアのプーチン大統領をヒトラーに例えて物議を醸しました。おそらく、両者とも民主化の流れを悪用した独裁者なのでしょう。かつてのエリツィン大統領は、曲がりなりにもソ連解散後のロシアの民主化を目指しました。その過程で生まれたのが、プーチン政権です。民主主義を強く求めなかったロシア国民が、独裁者の誕生を見逃してしまったのです。ヒトラーもまた、非常に民本的だったヴァイマル憲法の下、選挙を通じて首相になり、国民投票で独裁を承認されたのです。本書には、その過程が詳しく描かれており、大いに考えさせられます。ナチス的な時代は、まだ終わっていないのかもしれませんが。ちなみに、大正デモクラシーの流れを受けて昭和3年に第一回男子普通選挙を実施した日本は、そのわずか3年後の昭和6年には満州事変を起こすと、昭和8年には国際連盟を脱退し、一気に軍国主義に邁進することになりました。</p>		
長距離走者の孤独	アラン・シリトー /著	集英社
<p>B.ディズレーリは、1845年、英国には富者と貧者の「二つの国民」がいると評しました。しかし、1945年に誕生した労働党政権は、国民保険法、国民健康奉仕法、国民扶助法を次々と制定し、「ゆりかごから墓場まで」を旨とする福祉社会を築いてゆきます。それでも、本書が書かれた1959年当時、まだ二つの国民は分断されたままでした。経済的な最低保障政策は、相対的な格差を残しただけではなく、何よりも文化や価値観の対立を解けなかったのです。この物語は、更生施設に入れられた少年が一人称で語る形で、それを象徴的に表現しています。施設内で長距離走の能力を見出された「おれ」は、表面上は真面目に練習する選手となり、競技会の代表選手に選ばれます。しかし、大会では、ゴール直前まで独走しながらも、そこから先へ進むうとはしませんでした。あたかも、二つの国民の分断線を越えることを拒否するかのよう、頑なに動かなかったのです。</p>		



まちのひと 薬師院 はるみさんの紹介本リスト

図書館学者

民主主義	文部省/著	KADOKAWA
<p>1948年より53年までの間、中学及び高校で用いられていた文部省著作教科書の復刻版です。教科書だからと侮るなかれ。全443頁の大著です。そして、知る人ぞ知る名著なのです。実際、1981年には日本図書センターから、1995年にも径書房から復刻版が、2016年には幻冬舎新書よりエッセンス復刻版が出ています。もちろん、全て大阪市立図書館にも所蔵されています。元々は上下巻だったのですが、上巻だけなら国立国会図書館のサイトで読むことだって可能です。なぜ下巻は館内限定公開なのか。城東の名物館長さんに尋ねてみることにしましょう。</p> <p>ともあれ、中でも断然お薦めなのは、内田樹氏の解説がある「角川ソフィア文庫」版。我が家には「内田版」が二冊もあります。内田氏曰く、「読み終えて、天を仰いで嘆息することになった」(P.446.)。70年前は中高生に443頁の教科書で民主主義を訴えていたのです。</p>		
ベーシック・インカム入門	山森 亮/著	光文社
<p>たまたま我が家の本棚に並んでいたというだけで、大した期待もせずに読み始めた本でした。予想を裏切り、目から鱗の連続でした。「ベーシック・インカム」という、コトバだけは誰もが聞いたことはあるけれど、本旨がよく知られていないであろう仕組みが、真面目に丁寧に言葉を尽くして説明されています。中でも、第1章の「「公立の小・中学校、高校、大学には低所得世帯の子どもしか行っていない」という社会を想定」(41頁)した例え話は、秀逸です。ここでストンと腑に落ちればしめたもの。後は最後まで一気に読めます。以下、付箋を貼っていた箇所を引用します。</p> <p>人の命は大事だと誰もがいう。であるなら、人の命がお金が無いために奪われることはあってはならない。そうした合意の上に、…福祉国家という制度が築かれたはずだった。だが、実際に日本型の福祉国家が行ってきたのは、命を序列づけ選別することで…あった(60頁)。</p>		
彼の生きかた	遠藤 周作/著	新潮社
〔おまけ〕 灯のうるむ頃	遠藤 周作/著	KADOKAWA
<p>遠藤先生の作品はどれも大好きです。好き過ぎて、勝手に「先生」と呼んでいます。集めた文庫本を数えてみたら87冊もありました。先生がお亡くなりになったのは、すでに四半世紀以上前のことですが、訃報に接して真っ先に心に浮かんだのが、「もう、新作が読めない！」だったことを覚えています。</p> <p>カトリックを扱った小説や、内外の歴史物語、「悪」が主題の心底怖い話など、どれもこれも圧巻ですが、狐狸庵先生の名で執筆なさったエッセイも粋でユーモアたっぷりです。全作に共通するのは、「弱い人」に注がれた温かい眼差しです。その「弱い人」が実は最も「強い人」だったのではないかとしみじみ感じられる瞬間が、まさしく「遠藤ワールド」の真骨頂。その代表が『彼の生きかた』。まだ読んでいないあなた、もったいない！人生損してますよ！</p> <p>おまけ: 連れ合い・薬師院仁志の「イチ押し」は『灯のうるむ頃』だそうです。うーん。確かにこれも捨てがたい！</p>		
幸せになる資本主義	田端 博邦/著	朝日新聞出版
<p>付箋を貼ったり線を引いたり、時には書き込んだりもしながら読みたい本に出会うことがたまにあります。私にとって本書はそんな一冊です。違和感が言語化されていく感覚になる、読書の醍醐味を味わえました。</p> <p>連れ合いが博邦さん(連れ合いはそう呼びます)から直々に頂いたのですが、それを汚してしまうのが引け、自分用に新しく買いました。実は私は、図書館で借りた本でも同じことがたまにあります。お気に入りの出会えた、ちょっと幸せになる時です。</p> <p>それはさておき、本書には、日本型資本主義のとんでもなさや自己責任の残酷さが、様々な事例を挙げながら理路整然と説かれています。たしかに、すらすらと容易に理解できる内容ではありませんが、時間をかけてでも読む価値は充分にあると断言します。</p> <p>博邦さんの渾身作が刊行されてからすでに十年以上が経ちました。さらに厳しい現状だからこそ、「幸せになる」光明を大切にしたいと思います。</p>		
レトリック感覚	佐藤 信夫/著	講談社
<p>言葉愛する全ての人に知って欲しい好著です。随分前に書かれたものですが、いつまでも古びることのない良書でもあります。院生の時、教授に勧められた本ですが、今では私が学生に勧めたいです。</p> <p>直喩、隠喩、換喩、提喩、誇張法、列叙法、緩叙法と、計7種類の比喩表現が、「レトリック」満載の軽妙な語り口でテンポよくとりあげられています。すでにお気づきでしょうが、ここでいう「レトリック」とは所謂詭弁術ではありません。そうではなく、個別の体験や感情、あるいは個々の見解を、既存の言葉で何とか表現するために必須の「感覚」なのです。</p> <p>本書は、小難しい専門書でもなければ、よくある実用書でもありません。そんなものとは一線を画す抜群に面白い読み物だと思います。例として挙げられた引用文は、その多くが思わず音読したくなるような名文です。古今東西の文学作品をあれこれつまみ食いしているような贅沢な気分には浸れること請け合いです。</p>		